九州看護福祉大学紀要
Vol，12，№1，115-124（平成22年度）
ISSN 1344-7505

[原著論文]

過去のいじめ体験が青年期に及ぼす影響－体験の時期と発達の関連

野中　公子[1]，永田　俊明[2]

【要　旨】現代のいじめは、大人社会の反映であるといわれて久しく、30年以上は続いていると言われる。社会の複雑さや核家族化少子化などは家族の機能を変化させ、さらに受験戦争や格差社会は、社会全体の関係性の希薄さや個人主義の傾向を生み出した。親から自立していく過程において、児童期～思春期～青年期の友人関係は重要な意味を持つと考える。いじめ体験は、その後の生涯発達における青年期後期の適応状態とも関連してくることが予測できる。これらのことから本研究の目的は、大学生を対象とした質問紙調査をもとに、いじめ体験の時期とその後の影響との関係を明らかにすること、さらに現在の自尊感情と友人関係にどのような影響を及ぼしているのかを発達の観点から検討することにある。青年期の男女396人を対象とし質問紙調査を実施した。質問紙は、妥当性信頼性が標準化されている尺度、①友人関係②自尊感情③いじめの影響尺度を用い、統計ソフトSPSS(12.0)を使用した。本研究で以下のような結果が得られた。

1．小学校以前・小学校時期のいじめ体験の影響“同調傾向”は､その後の自尊感情に影響を及ぼす。
　同調傾向が増せば増すほど他者に同調しようとすることにより、自尊感情も高くなる。

2．中学校時期の、いじめ体験の影響“他者評価への過敏“は、その後の友人関係に影響を及ぼす。
　他者への評価が過敏になればなるほど友人関係は深まる。

3.複数時期の、いじめ体験の影響“他者評価への過敏”は、その後の友人関係に影響を及ぼす。
　他者への評価が過敏になればなるほど友人関係は深まる。

　本研究結果は、体験の時期ごとに分類し、過去のいじめ体験が現在の自己に及ぼす影響を検討できた点は意義があったと考える。

キーワード：同調傾向、他者評価への過敏、自尊感情

【緒言】

いじめや自殺などの事件は、社会の移り変わりとともに、変化し、「非行」「校内暴力」「いじめ」「不登校」などの問題は、現代の学校が抱える深刻な問題といわれて久しい。日本でいじめが社会問題として取り上げられるようになったのは1980年頃からである。同時期、世界的にもいじめは深刻な問題としてとらえられ、社会・文化の違いにかかわらず共通した性質・特徴のあることが明らかにされはじめた（Smith &Sharp,1994;森田，1998，2001）[1)]。

1978年いじめの仕返しに同級生の首を刺して殺すという事件が発生した。この事件はその背後に、社会の都市化や成熟化にともなう家庭や地域の変容と子育て環境の悪化、落ちこぼれや学歴偏重主義など、学校をめぐり深まる教育病理の陰がうかがわれることでも象徴的な事件となり､この年を森田[2)]は今日的ないじめ病の始まりの年、「いじめ元年」と言っている。

文部科学省の「平成21年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると、小中高特別支援学校におけるいじめの認知件数は73,000件で、前年度（約85,000）より約12,000件減少したと報告されている。内訳は、小学校34,766、中学校32,111、高校5,642で小学校が最も多い。男女比は小学校34,766（男19,165女15,601）、中学校32,111（男18,084女14,027）、高校5,642（男3,726女1,916）といずれも男子の件数が多い。

しかし、森田[3)]は、「学校は中途半端な詳しい調査を行なう必要はなく、それどころか研究者気取り、評論家気取りの調査などは、学校の取り組みを行なううえで百害あって一利なし、というものである。」さらに、「当事者の1人の教師が第三者的な態度で原因分析にかまけていてはどうしようもあるまい。」とも言っている。

そもそも現代のいじめは、どこからがいじめなのか、逸脱行動と言えるのか、境界が不明瞭な森田の言うグレーゾーンで発生している。加害性の認識も低く、当事者からは見えていてもその周辺

[1] 天草市立本渡看護専門学校　[2] 九州看護福祉大学看護福祉学部社会福祉学科大学院精神保健学領域

の者から見えていない現象であることを考慮する必要がある。さらに、表面に見えている現象だけでなく、その背景、潜在的要因、構造等々視点を変えてみていくと、その病理の根深さが伺える。

このようないじめの背景から、体験の時期やその期間からの影響も異なると考えられ、その影響は計り知れないと考える。

いじめの定義は、関係機関や研究者により様々な観点から提示されている。ダン・オルウェーズ[4]は、「ある生徒が、繰り返し、長期にわたって、一人または複数の生徒による拒否的行動にさらされている場合、その生徒はいじめられている」とし、文部科学省は、「当該児童生徒が、一定の人間関係のある者から、心理的・物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの。なお起こった場所は学校の内外を問わない」と定義した（2006）[5]。このように当事者特に被害者の主観に委ねられている感じを否めない。

さらに森田[6]は、いじめの役割には、被害者・加害者・傍観者・観衆の４層構造があると言っている。いじめの当事者は加害被害体験だけでなくそれを見てはやし立てたり見てみぬふりをする役割がいることから、当事者特に被害者の主観に偏った定義では説明できない部分もあるのではないか。いじめの定義からも、子どもたちの集団の中でおこる意地悪やいたずら、ちょっとしたからかいが、いついじめと呼ばれるようになるのか、自分が見聞きしたりその当事者になっていても、それがいじめかいじめでないかの判別が困難な場合もある。このような観点から本研究では、操作的にいじめを「集団における対人関係の中で、役割転換が行なわれる苦痛を伴う現象」と定義した。

いじめは数多くの要因により起こる複雑な現象である。いじめの原因や要因、その後の影響の研究等学際的に幅広く研究も行なわれているが、自尊感情と友人関係への影響の研究はあまりみられない。さらにその役割による影響が多く、いじめの体験の時期との関連を明確にした研究は少ない。いじめは対人関係の病と言われ、役割転換が容易に行なわれいじめの連鎖が続いていることから、自己の自尊感情や対人行動に何らかの形で影響を及ぼすことが考えられる。

現代のいじめは、大人社会の反映であるといわれて久しく、少なくとも30年以上は続いていると言われる。社会の複雑さや核家族化少子化などは家族の機能を変化させ、さらに受験戦争や格差社会は、社会全体の関係性の希薄さや個人主義の傾向を生み出した。親から自立していく過程の児童期～思春期～青年期の友人関係は重要な意味を持つと考えられている。その時期のいじめ体験は、青年期後期の適応状態とも関連してくることが予測できる。

したがって本研究では、体験の時期に焦点をあて、大学生を対象とした質問紙調査をもとに、いじめ体験の影響が、その後の自尊感情と友人関係にどのような影響を及ぼしているのか、体験した時期ごとに検討することとする。

【方法】

１．調査

１）対象：4年制大学生及び専門学校生399名（男子168名、女子231名）である。

２）時期：平成19年７～８月の２ヶ月間

３）方法：無記名の質問紙調査（集団一斉調査）を行ない質問紙は当日回収した。統計解析は、SPSS(12.0)を用いた。

４）倫理的配慮：(1)質問紙は、研究協力者の匿名性を守り、データは鍵のかかる場所に保管した。(2)質問紙表紙に調査目的及び同意の有無を記載し、本調査への参加不参加は不利益をこうむることはないことを説明した。(3)九州看護福祉大学倫理委員会に許可を受けた。

２．質問紙

３つの尺度について、現在の自分と、いじめを体験した時の影響を思い出す形式にするために、質問紙を２部に分けて構成し６件法でそれぞれ６から１点で評定した。本研究におけるいじめの定義を、文書及び口頭で説明した。

１）第1部：現在の自分自身についてと友人関係について回答を求めた。

(1) 友人関係尺度（岡田,1999[7],2005[8]）42項目：本研究では、青年期の大学生に対人関係のうち最も重要な意味を持つと考えられる友人関係に焦点を当てる。

(2) 自尊感情尺度10項目：Rosenberg(1965)によ

り作成された自尊感情尺度の10項目を、山本・松井・山本（1982）が邦訳し、個人の全体的な自尊感情の水準を測るものを用いた。自尊感情とは「人が自分自身についてどのように感じるのかという感じ方のことであり自己の能力や価値についての評価的な感情や感覚のことである」山本(1982) [9]

２）第2部：過去のいじめ体験について

(1)いじめの影響尺度42項目：香取（1999）[10] の作成した「いじめの影響尺度」を用いた。いじめ体験の影響を下位尺度（Ⅰ～Ⅵ）“情緒的不適応”“同調傾向” “他者評価への過敏”“他者尊重”“精神的強さ” “進路選択への影響”の６つに分類してある。先行研究により、尺度全体と各因子間において十分な整合性があることが示されている。尺度の内部一貫性を検討するため、全42項目に対してのCronbachのα係数を求めたところ.88、各因子間のCronbachのα係数は（.78～.88）であった。

過去のいじめの体験の有無を、“ある” “ない”の２件法で回答を求め、結果をそれぞれ“体験ある群” “体験ない群”とした。体験の時期は、①小学校以前②小学校③中学校④高校の時期での体験を問い、継続あるいは単発的に何度も体験している場合は複数回答を求めた。

【結果】

１．回答者の性別、年齢

18歳～27歳を対象とし、回答者は、男41.9％（166人）女58.1％（230人）で合計396人であった。

２．いじめ体験の有無と男女比

“体験ある群”は78.5％（311人）、“体験ない群”は21.5％（85人）であった。

男子は“体験ある群” 74.7％（124人）“体験ない群” 25.3％（42人）、女子では“体験ある群” 81.3％（187人）“体験ない群” 18.7％(43人)となった。

３．いじめ体験の時期

“いじめ体験の時期ごと人数と割合”をTable１に示した。結果は、度数の大きい順に示している。上から小学校・中学校が25.9％、中学校が16.7％、小学校が15.7％、小学校・中学校・高校が10.2％、中学校・高校が9.8％高校が7.9％となった。複数回答のあったものを“複数時期”として集計すると、全体の57.7％となる。

Table1 いじめ体験の時期ごと人数と割合ｎ＝305

いじめ体験の時期	人数	%
小学校・中学校（複数時期）	79	25.9
中学校	51	16.7
小学校	48	15.7
小学校・中学校・高校（複数時期）	31	10.2
中学校・高校（複数時期）	30	9.8
高校	24	7.9
小学校・高校（複数時期）	13	4.3
小学校以前・小学校（複数時期）	8	2.6
小学校以前・小学校・中学校（複数時期）	8	2.6
小学校以前	6	2
小学校以前・中学校（複数時期）	3	1
小学校以前・小学校・高校（複数時期）	2	0.7
小学校以前・高校（複数時期）	1	0.3
小学校以前・中学校・高校（複数時期）	1	0.3
合　計	305	100

４．過去のいじめ体験と現在への影響

１）過去のいじめ体験との関係

“自尊感情”と“友人関係”に関わる“いじめの影響尺度”の下位尺度６項目とのPearson相関分析を行なった結果、“自尊感情”と精神的強さ(r＝.297)に正の相関が、情緒的不適応(r＝-.529)、同調傾向(r＝-.357)、他者評価への過敏(r＝-.336)に負の相関が認められた。“友人関係”においては、情緒的不適応(r＝.153)に正の相関が認められた。

２）いじめ体験の時期と現在の影響との関係

次に、過去のいじめ体験の時期ごとに、現在の“自尊感情” “友人関係”との関連をみるためにPearson相関分析を行なった。

(1)小学校以前、小学校時期の体験をTable２に示した。“自尊感情”と“同調傾向”の間には５％の有意な正の相関が認められた。“友人関係”と“同調傾向”、友人関係と“精神的強さ”の間にはそれぞれ１％の有意な正の相関が認められた。

(2)中学校時期の体験をTable３に示した。“友人関係”と“他者評価への過敏”の間に有意な正の相関が認められた。

Table2　相関係数(小学校以前・小学校)

	自尊感情	友人関係
情緒的不適応	0.135	−0.03
他者尊重	−0.049	0.283
同調傾向	.379(**)	.324(*)
他者評価への過敏	0.008	0.186
精神的強さ	0.174	.296(*)
進路選択への影響	0.129	0.075

*5%　水準で有意(両側)** 1%　水準で有意(両側)　n=46

(3)高校時期の体験をTable 4 に示した。“友人関係”と“情緒的不適応”“他者尊重”“同調傾向”“他者評価への過敏”の間に正の相関が認められた。

Table3　相関係数（中学校）

	自尊感情	友人関係
情緒的不適応	0.177	−0.074
他者尊重	0.361	0.248
同調傾向	0.008	0.328
他者評価への過敏	0.172	.555(**)
精神的強さ	0.107	0.133
進路選択への影響	0.189	0.062

*5%　水準で有意（両側）　1%　水準で有意（両側）n=27

(4)複数時期の体験をTable 5 に示した。“友人関係”と“他者尊重”“他者評価への過敏”“同調傾向”に正の相関が認められた。

Table 4　相関係数(高校)

	自尊感情	友人関係
情緒的不適応	−0.276	.514(*)
他者尊重	−0.338	.437(*)
同調傾向	−0.207	.489(*)
他者評価への過敏	−0.397	.780(**)
精神的強さ	−0.177	−0.084
進路選択への影響	−0.175	0.229

*5%　水準で有意（両側）** 1%　水準で有意（両側）n=24

３）いじめ体験の時期と現在の影響

以上のように、相関関係が明らかになったので、過去のいじめ体験時期とその後の影響を検討するために重回帰分析を行なった。いじめの体験時期を５つに分類し、独立変数をいじめの影響下位尺度Ⅰ～Ⅵとし、従属変数を“自尊感情”“友人関係”として、強制投入法で分析した。結果をTable 6 ～ 8 に示した。

Table5　相関係数（複数時期）

	自尊感情	友人関係
情緒的不適応	0.058	0.077
他者尊重	0.069	.231(**)
同調傾向	−0.013	.186(*)
他者評価への過敏	−0.026	.224(**)
精神的強さ	−0.017	0.125
進路選択への影響	0.149	−0.005

*5%　水準で有意（両側）** 1%　水準で有意（両側)n=176

(1)小学校以前・小学校Table 6 －①②：

“自尊感情”と“同調傾向”0.006で（ｐ≦0.05）５％の水準で有意差が認められた。小学校以前・小学校時期のいじめ体験の影響“同調傾向”は、その後の“自尊感情”に影響を及ぼすことが言える。“友人関係”は、有意差を認めなかった。小学校以前・小学校時期のいじめ体験は、その後の“友人関係”に影響を及ぼすとは言えない。

(2)中学校Table 7 －①②：

“自尊感情”は、有意差を認めなかった。中学校時期のいじめ体験は、“自尊感情”に影響を及ぼすと言えない。“友人関係”は、“他者評価への過敏”0.0022で（ｐ≦0.05）５％の水準で有意差が認められた。中学校時期のいじめ体験の影響“他者評価への過敏”は、その後の“友人関係”に、影響を及ぼすことが言える。

(3)高校：

“自尊感情”と“友人関係”は、有意差を認めなかった。高校時期のいじめ体験は、“自尊感情”と“友人関係”に影響を及ぼすと言えない。

(4)複数時期の体験Table 8 -①②：

“自尊感情”は有意差を認めなかった。複数時期のいじめ体験は、“自尊感情”に影響を及ぼすと言

Table6-①分散分析

小学校・小学校以前の体験と自尊感情

ﾓﾃﾞﾙ	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
回帰	2756.38	6	459.397	2.161	.085(a)
残差	4888.48	23	212.543		
全体	7644.86	29			

予測値:（定数)、進路選択への影響, 他者評価への過敏, 情緒的不適応, 精神的強さ, 他者尊重, 同調傾向

従属変数:自尊感情

Table6-②重回帰分析小学校以前小学校の体験と自尊感情

係数a

ﾓﾃﾞﾙ		非標準化係数 B	非標準化係数 標準誤差	標準化係数 ﾍﾞｰﾀ	t	有意確率	共線性の統計量 許容度	共線性の統計量 VIF
1	(定数)	-3.405	16.163		-.211	.835		
	「情緒的不適応」	-3.849	4.173	-.189	-.922	.366	.664	1.507
	「他者尊重」	-4.982	3.749	-.277	-1.329	.197	.642	1.557
	「同調傾向」	13.030	4.337	.766	3.004	.006	.428	2.339
	「他者評価への過敏」	-.708	2.958	-.046	-.239	.813	.742	1.348
	「精神的強さ」	2.958	3.603	.183	.821	.420	.561	1.782
	「進路選択への影響」	-3.393	3.018	-.246	-1.124	.272	.580	1.724

a. 従属変数:自尊感情平均

Table7-①分散分析　中学校の体験と友人関係

ﾓﾃﾞﾙ	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
回帰	2.293	6	.382	2.324	.077(a)
残差	2.290	18	.164		
全体	5.254	24			

予測値:（定数)、進路選択への影響, 他者評価への過敏, 情緒的不適応, 精神的強さ, 他者尊重, 同調傾向

従属変数:友人関係

Table7-①重回帰分析　中学校の体験と友人関係

係数a

ﾓﾃﾞﾙ		非標準化係数 B	非標準化係数 標準誤差	標準化係数 ﾍﾞｰﾀ	t	有意確率
1	(定数)	2.499	.778		3.212	.005
	「情緒的不適応」	-.071	.096	-.156	-.744	.466
	「他者尊重」	.182	.147	.292	1.239	.231
	「同調傾向」	.073	.115	.135	.632	.535
	「他者評価への過敏」	.224	.089	.554	2.517	.022
	「精神的強さ」	-.025	.124	-.048	-.200	.844
	「進路選択への影響」	.036	.062	.123	.587	.565

a. 従属変数:友人関係平均

えない。“友人関係”は、他者評価への過敏が0.007で（p≦0.01）１％の水準で有意差が認められた。複数時期のいじめ体験の影響“他者評価への過敏”は、“友人関係”に影響を及ぼすことが言える。

【考察】

１．いじめ体験の有無と男女比

質問紙の結果から、回答者の78.5％が、何らか

Table8-①分散分析　複数時期の体験と友人関係

ﾓﾃﾞﾙ	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
回帰	4.035	6	.672	5.383	.001(a)
残差	3.498	28	.125		
全体	7.533	34			

予測値:（定数)、進路選択への影響, 他者評価への過敏, 情緒的不適応, 精神的強さ, 他者尊重, 同調傾向。

従属変数:友人関係

Table8-②重回帰分析　複数時期の体験と友人関係

係数a

ﾓﾃﾞﾙ		非標準化係数 B	非標準化係数 標準誤差	標準化係数 ﾍﾞｰﾀ	t	有意確率
1	(定数)	2.538	.359		7.076	.000
	情緒的不適応	-.127	.083	-.260	-1.533	.136
	他者尊重	.167	.098	.356	1.706	.099
	同調傾向	.008	.092	.015	.082	.935
	他者評価への過敏	.218	.075	.577	2.911	.007
	精神的強さ	.051	.081	.116	.627	.535
	進路選択への影響	.005	.043	.016	.108	.915

a. 従属変数:友人関係

の役割で過去にいじめ体験をしていたことになる。いじめ体験の有無についてはこれまでも実態調査などのデータは報告されているが、それらは被害者や加害者の体験がほとんどで、その時期との関係について明らかにしているものは少ない。森田（1996）[11] の調査では、なんらかのかたちでいじめに関わってきた者の比率を「いじめの接触率」とし、小学校6年生では77％、中学校2年生では62％であった。このことを森田は、「今日の子どもたちのいじめへの接触率はきわめて高く、このことは現代の小・中学校では、いじめがきわめて一般化していることを物語っている。」と言っている。いじめとはどんなことをいうのか明確ではなく、回答時に迷いもあったことも考え

られ、“ない”と答えた回答者の中にもいじめ体験者がいることも予測できる。もはや、集団の中でいじめ体験をしない人はないことがほとんどいないのではないかと考えている。

次に男女比をみると、“体験ある群”は男子74.7%（124人）、女子では81.3%（187人）の結果となった。やや女子の方が割合は多いが男女共高い数値がでた。

身体的いじめと間接的いじめの被害体験に性差があることを示した研究では、身体的いじめ、言語的いじめで男子の加害経験者が多く、身体的いじめで男子の被害経験者が多く、間接的いじめでは女子の被害経験者が多いことが示された。男女それぞれの特徴は、男子に多くある“身体的暴力”は、やり返したり反抗するような行動をとったとしても、自分の弱さや力関係を直接思い知ることになることにもなり、被害経験の場合は特に影響は大きいことが予測できる。対して無視したり仲間外れにしたりといった関係性攻撃は女子に多い(岡安・高山，2006)[12] という性差による長期的影響も明らかにされている。

今回の結果は、体験の時期ごとに男女別に分析していないため明確にはできないが、男女の本来の発達の特徴が関係しているように思える。仲間集団との関係が重要な時期にいじめの当事者になることは、発達上の男女の性の特徴も絡んで、男女の特徴が見られることも予測できる。

２．いじめ体験時期の現在への影響

本調査により明らかになった、過去のいじめ体験の時期と、自尊感情・友人関係の関係を考察する。深谷（1995）の国立の教育系大学生1,2年生377人を対象とした「小学校中学校時代にいじめがどのくらいあったか」という回顧調査は、“ある”と答えた学生は、小学校72.1%中学校63.1%という結果だった。

さらに森田（2001）[13] は、「中学校でのいじめでは、深刻ないじめが長期にわたって少数のこどもに集中する傾向がある」とし、本間（2003）[14] は、「中学校は、いじめの発生件数発生率とも多く、加えていじめ自殺など深刻ないじめも中学生が中心である」と明らかにしている。本調査でも中学校時期の体験の数は多く、複数時期の体験にも中学校が含まれていた。現代の大学生が小学校、中学校、高等学校の頃1980年代後期は、現代型のいじめ現象が注目され、まさに現代型のいじめが蔓延し調査研究が進められる反面で潜在化し教師や親などの社会全体に見えにくくなっていったことも伺える。中学校になるといじめの内容も陰湿になり思春期の特性からもいじめられていることを人に言えず、より周囲から見えにくくなる事も考えられ深刻さが伺える。

１）同調傾向

小学校以前・小学校時期のいじめ体験は、重回帰分析の結果から、いじめ体験の影響である“同調傾向”が高まるとその後の自尊感情も高くなることが明らかになった。

学童中期になると、自分の属している社会集団に貢献することができるようになり、これらの集団から承認され受容されたいと考える。この頃の心理社会的危機は勤勉性と劣等感とされ、この時期に失敗ばかりしている子どもは、劣等感を内在化させてしまうおそれがある。さらに困難な問題にぶつかった時、それを解決しようと努力せずに、自分を不適当なものとしてとらえてしまうのでる。

この時期の子どもは、その後の人生段階で重要な意味を持つ仕事や社会的技能を発達させる。学校に関連した技能を獲得することに加えて、社会的協力、自己評価、仲間集団への参加に関する諸能力を増大させていく（バーバラM・ニューマン，1997）[15]

モリス・ローゼンバーグ（1965，1979）[16] は、自尊心尺度の結果から、「自尊心得点の低いものは、高いものよりも不安が強く、対人関係がぎこちなく対人関係が孤立していた。さらに自尊心尺度の低いものは自信に欠けリーダーではなく、高い望みをもつが失敗を恐れているなどの傾向がみられた。」と言っている。いじめと体験と自己概念との関係の研究で、坂西（2004）[17] は、「いじめ被害経験者は、自己への肯定的な評価が低いという結果が得られた（Callaghan＆Joseph,1995）。オーストラリアでも、いじめられる傾向のある生徒は、自尊感情が低いことがわかった（Rigby＆Slee,1993）。いじめ被害者と自尊感情における関係は、比較的一貫した調査結果が得られている。」と言っている。しかし一方、いじめ加害者と

自尊感情との関係は研究によってわかれ、坂西(2004)[18]は、「たとえば、アイルランドのオ・ムーア（O'Moore,2001）の研究が示すように、いじめ被害者同様、いじめ加害者も低い自尊感情をもつという結果を報告するものもあれば、オーストラリアのリグビー（Rigby&Slee,1993）らの調査が示すように自尊感情と関係をもたないとするものもある。」とも言っている。

学童前・中期の自尊心の形成、仲間集団の中で成功や失敗を体験しながら困難なことにぶつかっていく経験が、この後の青年期や成人期の発達に影響を及ぼすとされるが、現在のいじめは異質なものを排斥する特性も持っている。仲間集団に同調し、集団の中に居続けることで自尊心を形成していくとは考えられないだろうか。

さらに、学童前期の子どもは、失望感や無価値といった感情を形成しやすい。しかし、自分自身に強い肯定的感覚を持っている子は積極的に活動できるが、否定的感覚を持っている子は、冒険や新奇な場面に不安げに反応することが多いという。これらのことから、主に学童期の心理学的発達の見地から、いじめ体験の同調傾向はその後の自尊感情に影響を及ぼす関係性が伺える。“同調傾向”は、周囲への同調を示す。いじめを何らかの形で体験し、他者に同調することで自己の肯定感覚を養いながら自尊感情を上昇させていくことも考えられないだろうか。

２）他者評価への過敏

中学校時期の体験は、重回帰分析の結果から、いじめ体験の影響である“他者評価への過敏”が高まると、その後の友人関係も強くなることが明らかになった。この結果は、複数時期の体験も同様の結果となった。

思春期のはじまりから高校卒業までの時期は、仲間からの承認に敏感になる。高徳(1999)[19]は、現代のいじめの特徴のひとつに「思春期特性」をあげた。「思春期は、親からの自立の時期であり、いじめにはそのための仲間、友達との『集団同一性』が象徴的に儀式として試されるという特性がある。」と言っている。

現代は、社会の複雑化や核家族化・少子化などによる親子関係の変化に伴って、青年たちの自立の遅れも指摘されているが、仲間集団との友情は、仲間意識や喜びと同様に親密性、支持、理解の機会をもたらしてくれる。集団の中で、保坂（1996）[20]は、「心理社会的危機を乗り越える集団のそれまでの安定した親との関係から自立していくにはさまざまな不安や恐れが伴うものであろう。従って、当然それをいっしょに乗り越えようとする仲間・すなわち友人関係がこれまで以上に重要になってくる。」と言っている。成長発達上友人関係を保つことは重要なことであると言えそうだが、現代の青年の友人関係の特徴として岡田（2005）[21]は、「互いが傷つくことを避けるため、内面的な話題を避け、明るく群れる傾向が、1980年代後半ころから次第に指摘されるようになってきた」言っている。これは、現代の青年が、相手の世界に踏み込まないように距離を取った関係を維持しながら、他者とは切り離した自己の世界を形成しようとしている可能性を示唆している。

いじめが日常生活と隣り合わせにある中、現代の友人関係は希薄化し、周囲の反応に敏感にアンテナをはりながら均衡を保ちながら表面的に友人関係を保っているのではないだろうか。仲の良い集団の中でもいじめは多く発生し、いつ自分が標的になるかわからない状況の中で、仲間集団とのバランスを保ちながら自分の居場所を探していることも考えられる。いじめの影響である“他者評価への過敏”が友人関係に影響を及ぼすということは、他者からの評価を気にするようになり、仲間集団を評価し選択する友人関係を築いていくことになっていったとも考えられる。

いじめの体験から時間の経過があり、その後の回復過程や、友人、家族、教師等のサポートの影響との関連を明らかにはしていないため、標準化はできないが、その後の影響としては注目すべき点である。調査協力者は、特定の大学生専門学生であり、過去のいじめ体験を聞くことにより、時間が経っていることで冷静に見ることができるというメリットもあるが、経年による記憶変容の問題や体験後の様々な環境の影響を受けて変化していることも考えなくてはならない。

また、いじめ体験が自尊感情や友人関係に影響を及ぼすのか、育った環境が自尊感情や友人関係に影響を及ぼすのかという点も検討すべきことで

あると考えている。しかし、大学生の自己理解及びいじめの時期に焦点をあて、その後の自尊感情と友人関係への影響を調べることに示唆を与えることにはなったと考える。

高校時代の影響については、予測に反して影響は認められなかった点は、回答者の多くが20代の大学生、専門学校生であることから考えると、高校時代は直前の時期であり過去の体験とはいえない記憶に新しい体験であった点も要因と考えられる。

【結論】

以上のことより、下記のことが言える。

1．小学校以前・小学校時期のいじめ体験の影響“同調傾向”は、その後の自尊感情に影響を及ぼす。
同調傾向が増せば増すほど周囲に同調しようとすることにより、自尊感情も高くなる。

2．中学校時期の、いじめ体験の影響“他者評価への過敏“は、その後の友人関係に影響を及ぼす。
他者への評価が過敏になればなるほど友人関係は深まる。

3．複数時期の、いじめ体験からの影響“他者評価への過敏”は、その後の友人関係に影響を及ぼす。
他者への評価が過敏になればなるほど友人関係は深まる。

本研究では、いじめの体験時期ごとに長期的な影響について考察した。いじめは大人社会の反映である。1980年代からいじめは注目され悲惨な結果を招いた事例も多数みられる。社会の変化による大人社会の変化は、子どもの成長発達に影響を及ぼし、その結果子どもたちの世界が変容してきたことも考えられなくはないだろうか。今なお注目されるいじめに対して、早期発見早期対処によって深刻化させないような様々な取り組みがなされている。しかし、現実はいじめを全く体験しないまま成長することはまれであり、その影響に関しては不明瞭なまま個人の対処能力に頼っている現状がある。

前述のように、発達の過程でおこる外的要因の一つにいじめ体験があること、交絡因子との関連を検討していないことなどで標準化はできないが、いじめ体験の時期ごとにその影響を明らかにできた点は、いじめ体験の長期的な影響に示唆をあたえることになった。

さらに、本研究の協力者のほとんどは、青年期の大学生または専門学校生であり現在も長期的な影響を感じながら対人関係を送っている方もいることも予測できる。

今後、いじめの長期的影響を明らかにするためには、被害者自身が大学生になった現在、いじめを体験してから現在に至るまでの交絡因子も重要な因子である。今後はどのような影響を受けて現在にいたっているのかなどの要因を検討していく必要もあると考える。いじめの時期によっては、どんな立場を経験したかによってもその後の影響も大きいことが考えられる。

【謝辞】

調査に快く協力していただいた学生の皆様に心から感謝いたします。ありがとうございました。

【引用文献】

1）森田洋司，心の時代の教育―いじめ・不登校の克服にむけてー，日本養護教諭教育学会誌,（14），（2001）

2）森田洋司，新訂版いじめ―教室の病―，清水賢二，金子書房，P181，（1996）

3）森田洋司・秦政春・星野周弘，岩井彌一（編著），いじめ予防・対応に生かすデータ集―，金子書房，P253，（1999）

4）ダン・オルウェーズ松井賚夫・角山剛・都築幸恵訳,いじめーこうすれば防げる,川島書店，P65,（1995）

5）http://www.mext.go.jp/b enu/houdou/19/11/07110710/002.htm,平成18年度「児童生徒の問題行動に関する調査」の見直しについて，文部科学省，（平成19年）

6）森田洋司・秦政春・星野周弘，岩井彌一（編著），いじめ予防・対応に生かすデータ集―，金子書房，（2001）

7）岡田努，現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛賚の関連について，立教大学教職研究，21-31，（1999

8）岡田努，現代青年の友人関係・ライフイベントと

自己の発達に関する研究，金沢大学文学部論集行動科学・哲学篇，第25号，P15-32，（2005）

9）山本真理子・堀洋道，心理測定尺度集Ⅰ―人間の内面を探る“自己・個人内過程”―，サイエンス社，P29，(2001)

10）香取早苗，過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究，カウンセリング研究， vol.32,No.1，（1999）

11）森田洋司，新訂版いじめー教室の病―，清水賢二，金子書房，P181，（1996）

12）岡安孝弘，高山巌，中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス，教育心理学2号，P137，（2006）

13）同掲書6)P33

14）本間友己，中学生におけるいじめの停止に関連する要因といじめ加害者への対応，教育心理学研究，51，Ｐ390-400，（2003）

15）バーバラM．ニューマン，フリップRニューマン福富護訳，生涯発達心理学，エリクソンによる人間の一生とその可能性，川島書店，Ｐ240～254，1998

16）同掲書9)P29

17）坂西友秀，いじめいじめられる青少年の心―発達臨床心理学的考察―，岡本祐子，北大路書房，Ｐ41，（2004）

18）同掲書17)P23

19）高徳忍，いじめ問題ハンドブック，つげ書房新社，P12，（1999）

20）保坂亨，子どもの仲間関係が育む親密さー仲間関係における親密さといじめ（親密さの心理）－，現代のエスプリ，至文堂，Ｐ43-51（1996）

21）同掲書8) P15-32

The Journal of Kyushu University
of Nursing and Social Welfare
Vol. 12, No. 1, 115-124 (2011)

ISSN 1344-7505

[Original Article]

The past influence that I torment it, and an experience gives for youth

– Connection of time and the development of the experience –

[1]Kimiko Nonaka [2]Tosiaki Nagata

【Abstract】

It is said that the modern bullying is said to be reflection of the adult society, and higher than 30 years continue for a long time.

The declining birthrate changed the function of the family, and the exam war and the gap-widening society produced tendencies of rarity and the individualism of the relationship of the Great Society more social complexity and nuclear family.

In a process becoming independent from a parent, I think that the friend relations of the - youth have an important meaning in - puberty in childhood.

Because I torment it, and it can predict the experience to be related to the adaptation state that is in the latter half of youth in the later life development, it is to examine current self-conceit feelings and friend from the viewpoint of development the purpose of this study clarifying the time of the bullying experience and relations with the next influence based on the inventory survey for university students more it-affiliated what kind of influence have. I carried out inventory survey for 396 men and women of the youth.The question paper used statistics software SPSS(12.0) with an influence standard of the standard , friend-related self-conceit feelings bullying where validity reliability was standardized.

This study provided the following results.

1. Influence "tuning tendency" of the bullying experience of the elementary school time has an influence on the later self-conceit feelings before an elementary school. The self-conceit feelings become higher by being going to go along with others so as to increase if tendencies to tuning increase.
2. Sensitive "to an influence" others evaluation of the bullying experience of the junior high school time has an influence on the later friend relations. As much as the evaluation to others becomes sensitive, the friend relations deepen.
3. Sensitive "from a bullying experience of plural time to the influence" others evaluation has an influence on the later friend relations.

As much as the evaluation to others becomes sensitive, the friend relations deepen.I classify these findings every time of the experience and think that the point that was able to examine the past influence that I torment it, and an experience gives to current self was important.

Key words* : *A tendency to tuning, the hypersensitivity to others evaluation, self-conceit feelings.

[1]Hondo Nursing Technical College

[2]Kyushu University of Nursing and Social Welfare, Graduate School of Nursing and Social Welfare